

LingvoオクトM+

2024年7月8日

(月曜日)

姫路市民会館四階第四会議室

7月例会

○詩

○川柳

○エッセイ・小説

Vol. 22



今後のオクトM+の予定

Vol. 22

7月8日（月）姫路市民会館

読書会講師：海埜今日子

8月はお休みですが・・・

情野さんのmeta猿楽が8月25日にあります

場所：たつの市揖保川町野田97-1

半田コミュニティセンター2階会議室

14時から

LingvoオクトM+の

参加は自由です。斬新な作品を募集します。

世話人高谷和幸

〒676-0815 高砂市阿弥陀1-11-24

e-mail takatani_kk@yahoo.co.jp

9月の読書会をしていただく方を探しています。自薦、お受けします。

眞贋

しろやあきのり

私の目をくり抜いて

何故つたら全てが嘘だから

造花が綺麗に見えてしまうように、よく見えるけど、何も見えない

それが私の目。めっ。眼。

眞実は遠くにバイバイ

何でも見えるように、何も見えなくして

への字の口男面

吉田ふみゑ

ある日

壁のお面と私の目が合った

それまで何も言わなかったお面が

口をへの字にして

話しかけてきた

どうしてそんなにバタバタするのか

また仕事が増えたのか

胡粉のはげたお面に私は問うた

どうして私を見るの

見たくないけど目に入るのだ

山間の閑静な書齋に飾られていたのに

突然外されて

カレーやみその匂いのするリビングの壁に吊された

夜になると

お風呂から頭わな姿で現われて

私の前でアイスクリームを食べる
やめてくれ
夫のようなことを言うのね

元はどこからやってきたの
書斎の主に聞いたけど

主は意識を遠くして
わからない
と言ったきり

主はこのごろ益々寡黙になった
口が酷く曲がってきた

私は思うのよ
あなたは吉野から来たのじゃないの
南朝の末裔かしら

人から人へと渡ってきた
流浪するお面が

私を見つめて言った
わからない

老人

内田 正美

(ゆっくり話を聞かせてください)

百歳もすぎたかのような老人に聞いてみた

無表情に視線をうかせて立っている

疲れて、それでいてまだ何か

考えているように思える

返答はない

まず あなたの立っている処

それから聞かせてください

歩いてきた路のことや 出会った人々のことを

話せないのは分ります

筆に絵具をつけて線を引いてみます

線はあなたの乗っていた船のように進み、羅針盤はありません

飛び散った砲弾の破片の飛ぶ放物線を

描く戦(せん)かもしれませぬ

どこかでセキレイが啼きました、声は森をながれ、背をながれ

何れにせよ 遠い遠い道程です

影を描きます、

あなたの物語を文字にします、わたしは深い森で迷います

森に出口はありません、木々は鬱蒼ともつれあい、ざわめき

蔦は樹をつたうセンになり

センは文字になりことばに変換され、いつの間にか降りはじめた雨です、ここにいてわたしを濡らす、こころを濡らす、

風の庭で影が揺らぎ、いま文字はわたしです

目を閉じた一瞬に、100年はすぎる

広い広いカンパスだ

枠はないので怖ろしい空間だ / 畑はまだない

深呼吸

浜田多代子

この雨は

上流でもかなりの雨量だったらしい

一級河川の揖保川は

灰色の水がうなる

水のおいがする

橋げたにある水位線まで

到達した濁流は

河川敷まで総なめにした

中州にあった木と雑草は水の下に消え

木々の頭だけが見える

警報の出ている

初めて大雨の揖保川を見た

初めて濁流の川面を見た

二週間たった頃

普段と変わらぬ揖保川があつた

川は細く蛇行して

音もなく流れている

川には鷺の姿も見える

中州の緑も濃い

散歩の夫婦が

いつものように椅子に座り

談笑している

突然男は立ち上がり

両手を空に突き出し

大きな深呼吸をした

今まで見たことがないという言葉が目につく

いつもより早い夏日

想定外か想定内か

人々の営みは続いている

平野さんの神様

高谷和幸

神社の産子（うぶこ）の役回りになったのは随分昔だった。ここには未来がないのう（現在というものも無くなっておる）と亡父が言う。当時の金ケ田の会長だった平野さんが話し出す。神門の脇の石垣の。その切り出された石には。シロサギがおる。縦に横に並んだシロサギがこちらを見ている。ダークルームからは一羽のシロサギにしか見えないが。予測という糸を放り投げて。するすると伸びる糸につかまっつて。娘の赤い裳裾が水にぬれて。乱れるさまを赤い目で見ている。シロサギの梵（そよぎ）はあかん。と亡父が水を差す。しかしシロサギが娘に対する異種結合に

寛容だった いったん生成してしまえば最後
に向かうところは同じだから 個体を超えて
相求め合う力と考えるぐらいが丁度いいのだ
ろう 彼の生まれた山間部の集落では 元日
でもないのに玄関に注連縄を飾る この地の
人たちは無意識が「畏む」と言えば 「かし
こむかしこむ」と応えるだけでいいらしい
谷を背にして鳥居をくぐれば空き地しか見え
ないが

失恋からの立ち直り

モス堀渕敬子

失恋した時とてもつらかった。学生だったので、考える時間がありすぎたのも問題だった。思いだしては泣いていた。まるで出口の見えないトンネルに入ったようだった。その辛さをノートに書いたり、友達に愚痴を言ったりして、その辛さと戦っていた。

両親には何も言わなかったが、父から「敬子はお通夜みたいにご飯を食べる。」と言われるぐらい暗かった。

彼の態度が冷たくなったり、同じESSメンバーで、彼と親しくしているある男子に話しをきいてもらったりしていたが、彼からは「あいつに相談したのは君のミスや。僕はいつ大っ嫌いや」とショッキングなことを言われた。

こんな時期に就職活動をしなければならず、本当にしんどかった。おまけに第2次オイルショックの不景気な時で、何社か受けたが全滅だった。が、何とかミドリ電化(現 エディオン)に就職が決まった。そこでの研修の時、常務が新入社員にこんな質問をした。「失恋したら、どうするか。」と言うのだ。何人かあてられたが、全員が「次の人を探す。」と答えた。すると常務は「それだと他の人の力を借りるといふ点で他力本願だ。仕事や趣味に打ち込んで立ち直るべき

だ。」と言った。理想としてはそうだろう。

私は恋愛不信になり、しばらくは恋愛のことは考えられなかったが、就職した翌年同じ支店で「いいな」と思う人ができて、付き合うことになった。しかし、前回の後遺症は残っていた。彼は会社の寮に住んでいたのだが、その寮の社員である女子グループと合コンすることになったという。私はそれをきいて彼を責めた。私という彼女がいながら何で合コンに参加するのかと。付き合いもあつたのだろう。しかし、別の女性が現れたら、私なんかすぐに捨てられるというトラウマがあつたのだ。結局、別の事情と私は会社をやめ、彼からは連絡が来なくなり、私も無理に追いかけることはせず、そのまま自然消滅した。学生時代振られた彼とESSのミーティングで久し振りに会ったことがあつた。

すると私の家まで送りたいというので送ってもらった。しかし途中でキスをしようとするのを、私は何とかかわした。次回も送りたいというので、それはキツパリ断わった。その当時、彼女とはうまくいっていなかったのだろう。しかし、身代わりにされるのはたまつたもんじやない。「こんな人だったのか。」と思うことで少しは気が晴れたように思う。

竹内まりやの曲で「元気を出して」という歌を知ったのはいつだっただろうか。この曲がもつと早く作られていて、もつと早く知っていたらかなり励まされていたのと思う。

この曲は、薬師丸ひろ子のために作られたそうで、全然知らなかった。のちに竹内まりや自身がセルフカバーしたのでその時に知ることができた。それでももっと調べてみると、元々は、アメリカのシンガーソングライタージェームス テイラーと別れて、同じくシンガーソングライターだった傷心のカーリー サイモンを励ますために作られたと知って驚いた。ジェームス テイラーは生まれはボストンだが、育ちはノースカロライナで、私はノースカロライナに住んでいた時彼のコンサートにも行ったし、昔彼が入院していたという精神病院が近くにあった。彼は麻薬患者だったというし、彼もサポートが必要だったのだろう。

失恋からの立ち直り法なんて、学校では教えてくれないが、こういう落ち込んだ時の対処法を教えるべきだと思う。そうすれば、自殺やストーカーなどの行為を少しは減らせると思うのだが。。。

訣別

瀬川健二郎

玲子さんは、わたしが四十代半ばのころ勤めていた荒廃した小学校に、突然舞い降りて来た小白鳥のような二十歳過ぎの女性。物静かであるが、状況を見極め、さりげなく自分の仕事をこなしている。落ち着いた雰囲気醸し出す。そのような立ち居振る舞いを眼にする内に、いつしか心を寄せていく。なによりも、清楚な服装に包まれたふくよかな肢体に引き寄せられる。でも既婚者であるわたしは、それ以上近づけない。だから、玲子さんが結婚するという話を聞いたとき、「よかつたなあ」

そして同僚の先生と一緒に実家まで、お祝いを届ける。その後、毎年、年賀状をもらっていた。

やがて、子どもが一人、二人と生まれ、年々成長する様子が写真とともに送られてくる。その度ごとに、幸せになられてよかつた……。

ところが、突然、夫が亡くなったという知らせ。まだ、子どもさんが、中学生ぐらいだろうか。気がかりにはなるが、どうすることもできない。なによりも妻の心を汲むと行動が差し控えられる。せいぜい、書いた本を送って、電話の声を聞くくらい。

年賀状には、着物姿の娘さんと一緒に、玲子さんが写っている。そのころ、わ

たしは疲労のため休職していた。身体を気遣う一筆が添えられている。

退職して数年後、わたしにも同じことが起こる。妻が亡くなるなんて、考えたこともない。見るもの聞くものすべてが妻に結びつき、身悶える。ピタリと食べ物の味がしなくなつた。何を食べても砂を噛むよう。無理やり流し込む。

ふと、玲子さんも同じ苦しみを味わつたんだなと脳裏によぎる。矢も盾もたまらず、電話をする―声が聞こえた。いつものように明るく、力強い声。

頻繁に電話をするが、留守電が多い。玲子さんの娘二人は、東京の大学へ行っている。だが、実家のお母さんが高齢で、毎日、お世話に出掛けているらしい。わたしには、彼女の置かれた境遇を推しはかる器量はなかつた。

一年半ほどして、ようやく会うことにこぎ着ける。二十数年ぶりの再会は、二言、三言ことばを交わすだけで、距離は縮まつた。もちろん、かつての新鮮な雰囲気は薄らいでいる。「五十になつたの。どうしましょう」

そういう冗談がいえるほど、苦労を重ねたのか、心許すものが湧いたのか……。

玲子さんの車で、お気に入りのお喫茶店へ行く。

お互いの心境を話した。どうしても、配偶者の亡くなつていく話になる。それはそうだろう。そこしか、共通点がないのだから。最も聞いてもらいたい、いいたいこと。しかし、その話題は、今ひとつ夢のない深刻すぎるものだった。

また、留守電の日が続く。かけても、ほとんどいないのだが、万が一かかつて

くるかもしれない。二、三カ月ほどたつて諦めかけたころ、かかってくる。一年続く。この居たたまれない状況を変えたい。わたしの新しい本が出来た。手渡したい。承知してくれる。この機会をのがしてはならない。長い年月の想いを手紙にしたため、本とともに渡そうとした。一瞬、玲子さんは眼を見開いて、躊躇する。

「家で読んでもいい？」

「ここで、読んでください」

「……………」

静かに封筒を取り、折った手紙を開く。読みながら、所々、うなずく。そんなことないわ、首を横に振る。終わりに近づくにつれ、その瞳は一点を見つめたまま……………」

はるか昔、十五歳の女子中学生に「告白」したときと同じ空——時間が止まった。沈黙がつづく。ようやく、

「はい……………」

聞きとれないほどの小さな声。

どこからともなく微かな匂いを感じた。玲子さんの汗だろうか。

「同じ苦勞をしてきたね」絞り出すようにいった。そして、一ヶ月後に会うことを約束した。ホッとす。

その日が来た。椅子に座って、まもなく、

「この日が、ずっと重かったです」

思わぬ言葉が出る。

重荷になることだけは避けなければならない。結局、一人相撲か。

玲子さんは、まだ落ち着ける状態ではない。突然、わたしのことが重なった。それを自分一人で受けなければならぬ。分かっていたが、気持ちが出てない。互いに配偶者を亡くしているだけでは、二人の接近には繋がらないことに気づいた。

プツリと、年賀状が途絶えた。

※

二年ほどたって、ある女性に経緯を話せた。

玲子さんが手紙を「家で読んでもいい」と聞いたとき、

「いつでもいいよ、待った方がよかったかも……。玲子さん、うれしかったと思う。だけど、あなたに立ち直ってほしかったの。だから、身をひいたのよ」

ー玲子さんは、わたしから去ることによって、妻を亡くした苦しみから訣別させてくれたのか。あなたの奥さんの代わりはできないわー喪失からの訣別。

少しずつ、妻は遠くなっていく。

ひとりで生きなければ、という心が芽生えてきた。

四月二十五日橋

諸井学

テージョ川の河岸に立つと、ひだりに四月二十五日橋が見える。その向こうに小さくクリストレーイ像。四月二十五日橋、私はこの橋を見るためにリスボンへ来た。毎朝部屋に置いてあるA4版の写真を見ながら、このロケーションを思い描いていた。

橋の下を大きな貨物船がゆつくりと進んでくる。対岸には小高い丘の連なりに所々建物がある。青い水面に白い帆を張ったヨットが浮かんでいる、三艘。観光船らしい船が波がしらを立てて進み、その周りをカモメが飛んでいる。リスボンの空は曇っていた。



投壘通信

玖

ハンゲシヨウ

海埜今日子

半分生きて、半分死んで。魚はね、飼えないの。そこはかつて住んでいた家に似ていた。ガラクタたち、大半は愛すべきものが、片付けを待つように、眠っている。そのなかに小さな壘があった。ガラスには、布をかけたような埃、そつと白さをぬぐうと、ふるえる水です。海底を模した世界、おおむねの、青や緑。砂底にはおもちやの海賊船や壺が沈んでいる。ああ、これだけで良かったのに、なぜ魚をそこに入れてしまったんだろう。訪れるたび、いつもそう思うのだった。数匹のうち、一匹はいつも死んでいる。白い腹を上にして、終わった生で、壘をみたして。ガラクタたちが、招くようにかたと鳴る。子どもの頃、家にたくさん魚がいた。あざやかで、水槽は小さな海です。魚はね、育てられないの。亡くなつて久しい父の手から、土に埋められてゆく、うつろな眼は、だれをも映してなかつただろうに、わたしはいつまでも視線として、しまつていった、だから。壘のなかで、

なにかが急に動き出した。日焼けした大きな手から、粉雪のように餌が降りそそいで、ええ、ずっと、半分ずつ。

ここはかつて住んでいた家に似てきた。庭には、緑だ、青だ、植物たちが育っている。大半は、愛すべき、けれども、植えた草、雑草、線引きがむずかしい。半分葉っぱ、半分花、のような、あれはハンゲシヨウ。ガラクタたち、片付けつつ、壇の内側から、温室のように世界をながめる。ぬるく、とざされ、なかば、明るさが差し入れられて。黒ずんだ腹が、どこかで、気になりだしたのかもしれない。庭の睡蓮鉢にメダカが泳ぐ、だったらいいねえ。起きる刹那に、父が笑う。雨あがりの朝、蜘蛛の巣が、白さをゆらして、獲物をとらえた。枯れた葉を拾い、壇を半分、きつと眠るよ。

犬犬訳西洋紀聞補遺5

千田草介

(承前)

そうしていまから十一年前の一七〇八年、この国の暦で宝永五年に、日本へむけて出発した。日本のキリシタン弾圧は、それはそればきびしいもので、布教はとも無理どころか、二度と生きては帰って来れんと、マニラの聖職者みんながわいを引き止めようとしたけども、わいの決意は変わらんかった。わが事ならず殉教するにいたったとしても、それも神の思し召しや。わいが乗った船は九州の南、大隅国の屋久島の沖合にたどり着いた。そこまでは大きい船で運んでもらい、わい一人で小舟に乗り換えて島に上陸した。わいは、日本人の姿かたちを真似て月代さかやきを剃り、ちよんまげを結うて、日本の着物姿に刀を差しとった。むかしまだ日本で布教ができたころ、ドン・フイリツポ支倉はせくら六右衛門ちゆうサムライがローマへやってきて時の法王様に謁見をたまわりはった。そのとき法王様が絵描きに命じて描かせなはった支倉はんの肖像画を、わいは見せてもろたことがおましたんでな。その記憶をたよりに、日本に溶けこめる扮装を考えたんやけども……。

わいはローマにおったときから日本語の勉強をしとったし、マニラに来てからも言葉の学習はつづけとったのに、いざ来てみて島の民と話そうとしても、さっぱり

通じひん。やっぱり言葉ちゆうもんは、字で書かれたものを読んだだけでは話せるようにはならんのやな。言葉は耳からや。日本語を日常使うとる者に習わんことには身につかん。日本人は御法度で海外渡航がでけんかったから、マニラにも日本語を話せる人は一人もおらんかった。実地に会話を習いたいと思うたところで、稽古をつけてくれる師匠がおらん。そやよって、文字から発音をおしはかるしかなかつたんや。ほんま、たよりないこつちやで。そればかりか、あとあとわかつたことやけども、日本は地方によつて言葉がまちまちで、とくに薩摩大隅ちゆうところは日本の南端ということもあつて、えろう独特な言葉が話されるところなんやそうな。むかしザビエル師も薩摩に着かはつたんやが、あのお方には、マラツカで出会つたパウロ弥次郎という薩摩生まれの信者がお供についとつたさかい、日常の用足しについては言葉のことで不自由されることはなかつた。ところが、わいにはそんな重宝な通詞はおらんわけで、さっぱり言語不通。かろうじて、〈にっぽん〉〈えど〉〈ながさき〉という地名だけが相手に通じた。わいは、ぎっくりした世界地図を砂地に画いて、〈ナンバン〉〈ロクソン〉〈カステイラ〉などの地域名を言い、ここがわいのおつた〈ローマ〉やと指さしてみせた。ローマというたら、日本から見たら禁じられた邪教たるキリスト教の総本山。そこから来た、顔つきは南蛮人やのに、けつたいなサムライの恰好の男。わいは怪しまれてとらえられ、役人に引き渡され、長崎へと送られた。

(つづく)

美しくおぞましい境界のほうへ――

―河合隼雄『昔話と日本人の心』 「見るなの座敷」を読む

海埜今日子

子どもの頃から、現実と幻想、日常と非日常、その境目について、考えることが多かったのですが、そんななか、心理学者の河合隼雄（一九二八―二〇〇七年）の書物、『昔話と日本人の心』に出会いました。特に「第一章 見るなの座敷」。ここでは、「うぐいすの里」というお話をとりあげ、〈樵夫の住んでいる町〉を日常、〈若く美しい〉女が来たであろう世界を、非日常とし、〈これを心の構造の方に還元すると、前者は意識の世界、後者は無意識の世界〉になるとして、心の在り方を見出そうと、昔話の構造を考察してゆきます。現実の多層性は、人間の意識構造の多層性と、密接なつながりがあるからです。そして、両者が出会う、「見知らぬ館」（見慣れない、日常にさしこんだ違和）を、〈日常の世界と非日常の世界の間地帯〉としています。ここが境界なのだと思います。「見知らぬ館」には、禁忌の場、「見るなの座敷」があります。これは、〈文字どおり簡単には見ることでできない、人間の心の深層を表わすものである〉。そして女が禁じた「見るなの座敷」は、館の中にある非日常です。この空間構造は、〈人間の無意識の深層には普遍的な層が存在する〉からか、全世界的にみられるパターンなのですが、中間地

の「見知らぬ館」や、日常・意識に近いところでは、西欧と日本、時代や文化などによって差異がある。この差異、意識―日常・文化に眼をむけながら、二章以降でも、天地、自然と神、創造、多岐にわたって考察され、とても奥行きが広く、魅力的なのですが、今回は第一章、門戸付近で、紹介してゆけたらと思います。

「うぐいすの里」、実は私は昔話としては聞いたことがなかったのですが、著者がここで採り上げたのは、お話の構成が（日本の昔話の特徴をよくそなえている）ことと、万葉集の頃から歌に、春告げ鳥として愛されてきた鶯が、きわめて日本的だからようです。

「うぐいすの里」のあらすじです。「若い樵夫が、森のなかで、これまで見たことがない館を見つめます。彼はそこで美しい女性に出会い、町で買い物をするからと、留守番を頼まれます。その際、「つぎの座敷をのぞいてくれるな」と言い残されたにも関わらず、男は禁を犯して次々と部屋へ入ってしまう。部屋にはそれぞれ美しい調度や宝物があったが、最後の部屋で、三つあった卵を落としてしまった。女が帰ってきて、あなたは娘たちを殺してしまつたと男をなじり、恨むのですが、ただ「娘が恋しい、ほほほけきよ」と鳴いて、鶯となって去って行きます。あたりは萱の野原で、館もなくなつていたのでした」。

「見知らぬ館」「美しい女性」は、樵夫のいた世界、現実の整合性、単層的にみえる世界の表層（そうしないとスムーズに処理できないことも多いので、仕方ないのですが）を突き破るきっかけとなります。そもそも昔話自体が、文学でもあるの

で、このきつかけということに文学、芸術の可能性を感じてわくわくしますが、次に移りましょう。

主人公たちが〈道に迷ったり、親に棄てられたりして、この世ならぬ存在と遭遇する〉、〈日常的な空間からやってきた男性が、非日常的な空間に出現した美女に会う、というパターンは、全世界の昔話や伝説に存在していると言っている〉とあります。ここでいう男性、女性は、無意識から脱却をした父性原理、無意識から意識が十分に自立していない母性原理などと絡み合っているもので、ややこしくはありますが、ひとまず性を気にしないでおくと、西洋の「白鳥の湖」、
「忠臣ヨハネス」（ドイツ）、「青ひげ公」（フランス）なども、類話として括れます。また、日本に戻ると、「鶴女房」、伊弉諾と伊弉冉の黄泉の国、さらに「羽衣伝説」「浦島太郎」「葛の葉狐」など。

こうしたパターンからも、昔話は〈普遍的な性格と、ある文化に特徴的な性格とを共有〉していて興味深いのですが、違い、文化差について述べる前に、「うぐいすの里」に戻ります。〈日常と非日常の世界の中間体で出会った男女は、すぐに別れてしまい、女性が町で買い物をしているとき、男性は「見るなの座敷」に侵入している。最後に彼らが再会するときは既に破局に到っていて、男性も女性もそれぞれもとの日常、非日常の世界へもどってゆく。これは拋物線を描いて運動する二つの彗星のように、二度の瞬時の遭遇の後には、永遠に会うことが無い。すこし脱線しますが、類話やその変遷から、この〈瞬時の遭遇〉の時間が、もう少し長くなつたのが、「浦島太郎」のお話とも言えるようです。〈彼の

見るなの座敷」の禁が「玉手箱」と重なります。五章で、それらのことを詳しく論じているのですが、浦島太郎がおじいさんになってしまったのは、(一度外界(無意識)へ行った者が現世(意識―外界)に帰ってきて、変わらぬ生活を送ることは非常に困難)で、浦島太郎はその困難さを克服できなかったとあります。

「浦島太郎」が出たので、日本と西洋の昔話の違いについて触れてみます。ロシアの昔話研究家のチストフが、孫に「浦島太郎」を読んで聞かせ、竜宮の美しさを語っても、孫は興味を示さず(何か別のことを期待している)のに気づきません。(「いつ、そいつと戦うの?」(中略)「主人公が竜と戦わず、また物語に出て来る竜王の娘と結局のところ結婚もしなかった理由がどうとうわからずじまい」ということになってしまふ。(中略)ヨーロッパの本格昔話では、魔法からの救済と求婚の成功という一連の冒険が語られることが多い)ので、なにか(自我確立段階)が未発達であるとか、起承転結がないなど、物足りなさを感じるということもあるようです。

違いといえばヨーロッパの「青ひげ公」などと、「うぐいすの里」を比べると、光と影、裏と表であるかのようには差があります。西洋では禁じる者が男、禁を犯す者が女、日本の「見るなの座敷」が自然的な美だったのに対し、西洋の部屋は、(死体や死体を食う夫)です。そして(与えられる罰は日本では無罰であるのに対し、西洋はすべて命を奪われる)。そして結末は、西洋では(他の男性の出現による救済)(幸福な結婚)、日本では、(女は消え去り、男はそのまま)(類話などでは例外がありますが)。

「この西洋的なものについて、ユング派のエーリヒ・ノイマン『意識の起源史』を元に述べているのですが、さっと触れるだけにします。ここでも、というか、こちらが考えとしては先なのでしょうが、自我の発生の過程は、物語や神話と対応しています。天地創造神話のカオスは、〈意識と無意識は分離されず混沌〉としている状態で、次に、自我が萌芽する段階で、太母（グレート・マザー）が現れる。この太母は、包み、呑み込む、両義的な存在。さらに次の段階で、意識が無意識から分離します。天地、昼夜、父母などの分離体験です。これが、英雄神話となる。〈無意識から分離された意識が、その自立性を獲得し、人格化されることは、神話のなかの英雄像によつて顕現される〉。ここでは英雄たちが怪物と戦い、勝利した後、宝物や女性を獲得します（この怪物、西洋では竜が多いようです。日本では八岐大蛇などが思い浮かびますが、それ以外は、龍神様など、非日常の世界で、敬われていることが多いように思います）。この怪物退治が、自我を呑み込む太母的な母親殺し、〈文化的社会的規範との戦い〉としての父親殺しという両方の側面を持ち、こうした危険な戦いを経て、〈自我が真に自立性を獲得しうる〉。そして、この戦いの後、英雄は勝利の証を手にする。ペルセウス神話（怪物退治の後に結婚）を例にとり、〈母親殺し、父親殺しの過程を経て、自らを世界から切り離すことによつて自立性を確立した自我が、ここに一人の女性の性を仲介として、世界と再び関係を結ぶことを意味している〉とするのがノイマンの説です。

これを踏まえ、西洋の「見るなの座敷」を見ると、西洋人の意識は父性原理によつて統制されているので、〈日常の世界、これを意識の層とみてもよいわけだが、

よって統制されているので、〈日常の世界、これを意識の層とみてもよいわけだが、ここは父親が禁止を与え〉、〈非日常つまり無意識の世界では禁止する者はグレート・マザーの姿となっている〉。〈この両者の中間帯に、夫と妻の関係が存在〉しているのは、親子のような上下関係ではなく、横の関係だからで、〈このような異性の結合が、従って、意識と無意識の統合のイメージとなり、重要な意味をもってくる〉。このように西洋では結婚のテーマが重要視されているのですが、日本の昔話では、おそらく重要ではない。このことを踏まえて、「忠臣ヨハネス」の物語を考察した後、最後に「うぐいすの里」に戻りますが、ヨハネスは端折って、収束に向かいたいと思います。

西洋の「見るなの座敷」は意味を追うことができませんが、日本のそれは、先のチストフの孫ががっかりしたように、自らを選んだ冒険も対決もなく、何事もなかったように立ちつくす結末です。これはヨーロッパ的に解釈しようとすると扱いにくい。そこで〈何も起こらなかった、ということを積極的に評価し〉、「無」が生じたのではないかと分析してゆきます。〈本来「無」は否定も肯定も超えた存在である〉。「うぐいすの里」のなかで、先に男（日常）と女（非日常）がそれぞれ拋物線を描いて、二点で交わるとありましたが、それが一つの円へと〈収斂してくるのが感じられる。それは、日常・非日常、男・女などの区別を超えて、一切をその中に包含してしまう円へ変貌する。それは無であって有である〉。〈このような「無」の直接体験は、おそらく人間の言葉を奪ってしまうものである〉。（中略）しかしながら、そのような「無」はそのまま言語化し得

ないにしろ、そのはたらきの一端を何らかの意味で言語化しようと努めるとき、それはひとつの解釈としてあらわされる。(中略)「うぐいすの里」の話は、根源的な無に対する民衆の与えたひとつの解釈なのである。この後、禅問答を挙げ、自己とは何かという問いを、無と絡めてゆきます。(昔話というものは、言うなれば、「自己」という書かれざる經典に対する民衆の知恵に基づき解釈なのである)。

最後に西洋の昔話は、その起承転結的な(完結性が心を打つ)のに対して、日本のそれは、一見完結していない(話によって聞き手が感じる感情を考慮することによってはじめて、ひとつの完成をみるものとなっている)とあり、参加型であるというのが、領けました。非日常の存在に対して「あわれ」を感じる、(プロセスの突然の停止によって引き起こされる美的感情)。この「あわれ」は、多くは去って行く女性に対して感じられます。「うぐいすの里」、神話の「トヨタマヒメ」、(鶴女房)、そして能の「黒塚」。この「黒塚」の「見るあの座敷」は、西洋のそのように、腐肉が爛れた、死体だらけの凄惨なものです。が、「うぐいすの里」の美しさと対をなす、(見られることを拒否すべき「恥ずかしい場」)だというもの、とても興味ぶかいものでした。(表から見れば限りなく美しく、裏から見れば限りなくおぞましいもの)。この両面性から、「あわれ」の美、「うらみ」の美についても言及され、更に西洋と日本の二元論についても触れて、一章は門戸としてひとまず幕をとじます。

「見しらぬ館」に境界として心惹かれると書きましたが、その場が、物語や

詩の発生する場として、の発生する場として、手招き、そして拒絶（という禁）をしているように感じたのかもしれませんが。「無」、「あわれ」、「うらみ」、移りゆく季節、かつてあった、これからもある息吹に、それでも触れようとすること。（文中へ）は『昔話と日本人の心』より引用）

※その他、昔話や神話に関しては、『昔話の深層』（講談社α文庫）、『おはなしの知恵』（朝日文庫）、『神話と日本人の心』（岩波書店）などがあります。

マレーシアから孫が来た

情野千里

マレーシアには行ったことが無い。1992年にインドネシアと韓国のカ
国海外ツアーを手始めに、タイ、サンフランシスコ、フランス、イタリア、ロ
ンドン、オランダ、ベナン、トーゴ、エクアドル、ポーランド、ギリシャ、台
湾、ベトナム、メキシコ、チリ、中国、ニューヨーク、フィンランド、スウェ
ーデンと、延べにするとおよそ50カ国をツアーして来たが、長男の哲也が○
歳、三歳、五歳の孫・理人を連れて里帰りして来ただけで、私はマレーシアへ
行ったことが無い。この夏、長女の久美が十四歳の孫・琉人の語学留学（短期
の）に同行しろと言う。次の前書きのタイトルは「マレーシアへ孫と行く」に
なるだろう（たぶん？）。

卓袱台がおおきにおおきにと歩く

七つ向こうのお山の猿が名付け親

算盤持ってペダンチックな付喪神

ひとり悲しむプラスチックゴミ回収日

ウイスキーは好きです地雷踏むまでは

妄想力で走る自動車査定額

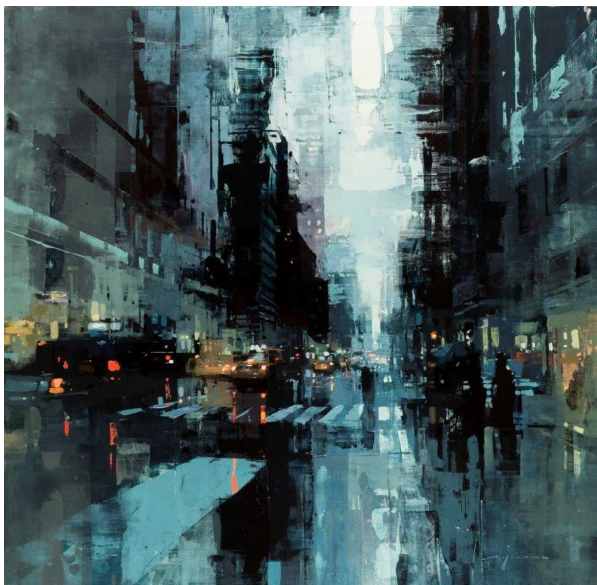
実をつけぬ花も花なり腹踊り（ドヤサア！）

売りはらう亡母が踊りに来る家を

亡弟三人くんずほぐれず蝮踊り

ばあちゃんばあちゃんばあちゃん五歳が連呼する

2024年6月10日（月）LINVOオクトM+6月例会のために



LingvoオクトM+電子版

ご希望の方は下記のQRコード
をダウンロードして電子版を送
れと明記の上通信ください。

無料でお送りします。



